

“いれて” “いいよ”

を考える

—子どものおそびへの入り方—



石川章子

四歳児入園当初、もちろんひとりおそびが多いが、近所の友だち同志で、「かごめ」や、つみ木おそびをやっている子どもたちもいる。そんな時、教師は手の離せない子どもをひきつけて「いれて」と言う。ほとんど「いいよ」という返事が返ってくる。こういうことをくり返していき、「あそんでいるところに自分も参加したい時には『いれて』と言えはいんだな」とおぼえていくと思う。そしてはじめはたいい「いいよ」と返事が返ってくる。しかしこういうこともあると思う。自分のやりたいことがみつからず、「みんなの中にはいってしまえば何かあそべるのではないか」という期待をもって、つみ木で基地をつくっている友だちのところへ行つて「いれて」と言ってみる。「いいよ」とやっている子どもたちは言う。その子どもは承諾を得てそのおそびの仲間入りをした訳だが、何をついているのかわからない。何をすればいいのかもわからない。はじめからやっている子どもたちも「いいよ」とは言ったが何をどうすればいいのか、どう協力してほしいのか、もちろん言わない。そこでその子どもは勝手につみ木を運んで適当につなげる。すると仲間から「ちがうよ、そこへおくなよ」と言われシェンとしてしまふ。そしてぬけ

ていく。仲間はおかまいなし。まったく無責任に「いいよ」と言っただけである。教師はどうあそびにはいれればいいかわかるが、子どもはそうはいかない。

こういうこともあった。五、六人、絵をかいている子どもたちがいた。別に同じ絵をかいていたわけでもなく、ただ何となくそこに集まっていたのであるが、紙とクレヨンを持って来た子どもがその集団に向かって「いれて」と言ったのである。絵をかいていた子どもたちも「いいよ」というのである。その子どもは、そこにすわって絵をかき始めた。教師が直接、間接的に教えたこの「いれて」「いいよ」が何ともこっけいな感じがしたのである。

二学期になると少しちがってきている。子ども同志で、やっていること、やりたいことがわかってくる。

つみ木あそびで「いれて」「いいよ」が前と同じようにやりとりされていた。勝手に並べる。すると「だめだよ、そこへおくなよ」の次に、「こつちへおいてよ」がつかぬがる。また「だめだよ、そこへおくなよ」と言われて「じゃあどこへおくの？」と聞くこともできるようになっていく。この「次のひとこと」で、その子どもと初めからやっ

ていた子どもたちは、スーッとつながってしまった。完全な仲間になってしまう。大人の中には「いれて」に對しているつでも「いいよ」と言っただれでも仲間にしてあげるのが仲良しで、いいことだと思っている人が多い。しかし、「いや」「だめ」と言えることも大切だと思う。これが言えるということは、「自分たちであそんでいる」という意識がはっきりしていることでもあると思う。ただ、断わられた子どもが、どうしてもその仲間になりたい時は、どうしたらいいかが問題だと思う。教師が「いれてあげてよ」と言うことはできるだけ避けたいと思っているのだが……。

あそびへのはいり方がいつも「いれて」「いいよ」でなくなる。直接的に「いれて」と言わないで自然に仲間にはいれるように、自分なりにくふうする。たとえば、おうちごっこをしているところへ絵本を投げ入れて「しんぶん」と言って走って帰ってくる。そしてようすを見ている。またしばらくして「しんぶん」と持って行く。うちにあった子どもが「わたしにもちょうだい」と言うと、何冊も何冊も持って行く。これでこの子どもはおうちごっこに新聞配達として仲間入りをしてしまったのである。また、

あそんでいる側の子どもたちにも、友だちを受け入れることができるようになっている。おうちごっこにはいりたいのだが、「いれて」が言えなくて家のそばに立っている子どももがいた。その子どもに対して、「おみやげ持ってくるなら入れてあげるわよ」という受け入れ方をするのである。何をすればいいのか、役を与えてもらえばどんなにかあそびにはいりやすいだろう。砂場であそんでいる時にも「いれて」と来た子どもに対して「いいよ、じゃあおみずくんできて」と何をすればいいのか指示をしている子どももがいた。私まで「はいりたいな」と思っていた子どもと同じようにうれしくなってしまった。砂場でのおみそ屋さんにはいる時「ここのお店の入口はどこですか」と聞く。そんなものははじめからなかったのであるが、お店の子どもは「えっ、じゃあここなの」と石で線を引く。そこからあらためて「ごめんください」とはいっていくのである。お店としても広がっていくわけである。

このように、子どもは意識しているのか、無意識のうちに行動にできるのかよくわからないが、何とかあそびにはいるうと方法を考えている子どもや、うまく受け入れてあ

げられる子どもをみると、「子どもってえらいな」と感じてしまう。しかしもししたら本当にそのあそびにはいりたいのなら、勇気はいるが、「いれて」と言う方が素直に自分の気持ちを表わしているのではないか、とも考えられる。また不用意に「いれてもらえば？」と子どもに声をかけてしまうことがあるが、その時「うううん」と首を横に振る子どもの気持ちはどうなのだろう。明らかにはいりたそうな顔をしているのに、はいり方がわからないのか、見ているだけでいいのか、あそびはおもしろそうだが、自分合いそうもない友だちだと思っているのか。

「いれて」「いいよ」ではないあそびへのはいり方、そして子どもの気持ちはどうなのをもっとこまかに見ていきたと思う。

(中央区立京橋幼稚園)